# 秋季以降蔓延するミカンサビダニ対策

平成20年10月号で、サビダニについて特集しましたが、昨年度も上島地区で大幅なサビダニ被害を出してしまいました。今年上半期は冬～春季の低温のため、もろもろのスケジュールが遅れ気味で、本稿作成中の7月末時点ではサビダニ虫体を確認することができません。例年でも上島でサビダニ寄生果を目にするようになるのが早くてお盆頃です。今年は7月始め頃まで降雨が多く、7月中下旬に防除をされたところが多いと思われますので、町内のどの園でもそろそろ発生時期となってきます。

**ミカンサビダニ寄生果の特徴を覚える**

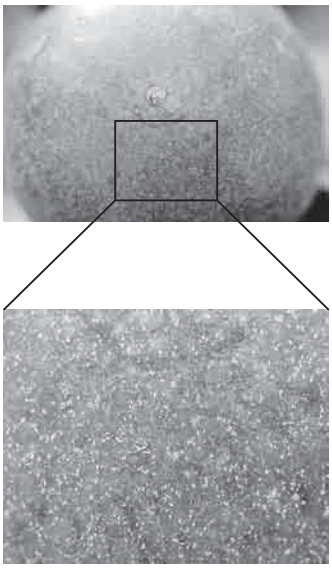
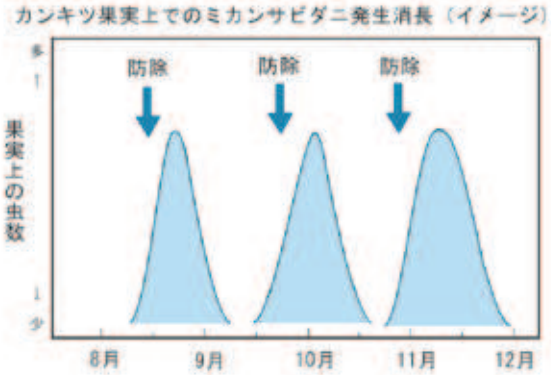
サビダニは体長0.17㎜、つまり1㎜の六分の一しかありませんので、虫体を確認することは不可能です。発生初期は1、2個の果実への寄生から始まりますが、このダニは歩くスピードが遅いので、この果実の上で爆発的に増え、サビダニがびっしり沸くと、ややオレンジ色をした細かい粉末が果実表面全体にうっすらとかかったような、特徴的な見え方をします。下の写真では、残念ながら青ー黒印刷なので、果実の色が再現できていませんが、画面右の果実のキワあたり、ピンボケでぼんやりしていますが、このぼんやり感が特徴です。もしこれが単に土埃なら周囲の果実に均等に見られますが、サビダニはそのうち数個だけ特にぼんやり見えます。また、以前行った防除薬が果実表面に残っていても粉が吹いたように見えますが、防除薬の場合は水滴が乾いた痕がムラになっており、判別できます。

こうした果実が最初に発生するのは日当たりの良い園の南～西に面した、特に温度が上がりやすそうな樹の、そのまた西日の良くあたる樹冠外周、腰より高い部位です。お盆明け以降10月いっぱいまでは、園内のこうした暑い、日当たりの良いところの果実は特に入念に観察し、こうした果実を見逃さないようにしましょう。

**応急防除はその周辺を、すぐ！**

もし不幸にしてこうした『粉吹き』ミカン（被害果の石ミカンではありません）を見つけてしまったら、2～3日のうちにはとりあえずこの果実周辺だけでも防除すべきです。「次回の定期防除は月末だから…」などと悠長なことを言っていると、2週間あれば確実に1世代更新してしまうので、ダニの数は数十倍に膨れ上がり、寄生果実が周辺に広がってしまいます。果実の寄生から石ミカンになるまでに日数を要するので、防除薬でダニを殲滅できたとしても、その後次々と被害果が現れ、「ちっとも防除が効いとらん…」といった事態になってしまいます。近隣の無防除園、放任園からの飛散も懸念され、毎年サビダニの被害果が見られる園では、たとえ寄生果が見られなくても、10月末まで、月に1度の定期防除でダニ剤の混用が必要と考えます。

サビダニがびっしり発生した果実



枠内を拡大：涙滴型のものがサビダニ成・幼虫、白い針状のものは抜け殻